# 文学部が通告のむ

## 東教大 異常事態回避にメド

10/7 朝日

機動隊導入をめぐって大学側から「最後通告」を突きつけられた東京教育大文学部は六日の教授会で、この通告を全面的にのむことを決め、同夜入江文学部長から大学側に回答した。

大学側は七日、臨時評議会を開き、この回答をもとに授業再開問題を審議するが、文学部教授会の回答は大学側への"全面降伏"を意味するため、最終的には大学側の授業再開計画に文学部教官を全員加える線に落ちつくとみられ、大学側と文学部教授会の二本立て運営という異常事態は避けられる見通しとなった。

これによって文学部の授業は昨年六月末のスト入り以来、一年三カ月ぶりに再開される見通しとなった点、授業計画の具体的立案、実施などの権限は、すべて各学部長会による「授業実施委員会」（非常会の下部機関）の手に移されているので、文学部教官が直接参加できるのは授業だけとなった。

六日の教授会は午後一時過ぎから始り「最後通告をのむことは、これまで強調してきた官僚支配から解放に、みずからの自治の確立を認めることになる」「文学部では一日、大学側との対決を再確認し、教授会自治の確立を始めるべき方針を決めたばかりだ、いまにいたっての方針転換は無原則な妥協だ」などの強硬意見が出たが、回答期限ぎりぎりの七日午後零時前になって「大学側とのこれ以上の対決は学部の破滅を招く」との意見が大勢を占め、採決の結果、賛成三八、反対一六、保留一で最後通告の受諾が決った。

大学側が三日に、最後通告として提示した条件は①教授会の責任で全教官が所内の秩序に努力する②六月から続いている家宅捜索派の文学部教官三十八人の停職を正式の懲戒とし終わる、など四項目で、宮島学長代行による学内正常化の強硬への全面協力を求めたものである。

〈解説〉前授業再開をはじめ学内正常化、授業再開などの問題で、大学側と対立してきた東教大文学部が六日、大学側に"全面降伏"したが、背景には、やはり大学法の問題の圧力があったようだ。

同大学は三月に坂田文相が名ざしで指摘したように、この学部では十二月末は大学法による教育、研究の休止という事態も考えられ、在校生の二年進級留年、二年連続の入試中止という事態も起りかねない。入試再び中止になれば、学部の運命に深いとまれる恐れもある。

こうした状況のもとで、一部の教官は学部を見捨てて私立大学に就職運動を始めるなど、浮足立った状態だった。

全面降伏に学生はどう対応するか。代々木系学生は教授会の解散。しかし、文学部教授会が、みずからの自治の確立を求めたことについて一般学生が反発、授業正常化の障害になる心配もある。

10/7 夕刊

# 「もうだめだな」

## 東教大文学部授業再開 あきらめ顔の学生ら

東京教育大学文学部教授会が六日夜、大学当局に全面降伏、学長責任の検問協力などの条件で一年四ヶ月ぶりに授業を再開する方針を決めたが、一夜明けた七日、キャンパス内は機動隊員がいっぱいで学内の空気は相変わらず緊張としていた。

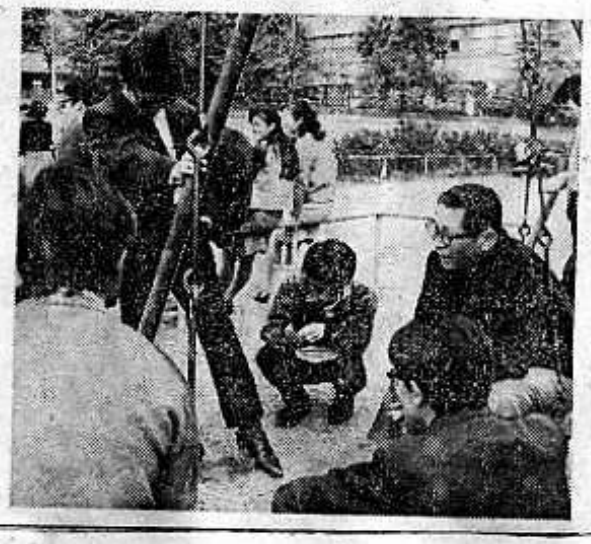
午前九時ごろ、大塚のキャンパス内には機動隊員を満載したトラック三台がものものしく構えていた。正門は相変わらず閉ざされたまま。機動隊の輸送車やパトカー、郵便車らが通るときだけ開かれる。正門わきの通用門をくぐると守衛が学生の受講票をきびしくチェック、その後ろには"検問教官"や機動隊員がずらり。「授業再開は決まったが、今後どうなるのかな――大学前の公園で教授と話合う文学部の学生」

授業再開は決まったが、今後どうなるのかな――大学前の公園で教授と話合う文学部の学生

「受講票をもらえた」の理由で通過された学生は「何ひとつ変わっていないじゃないか」と捨てゼリフ。

文学部の教室はどこもガランとしていた。教官陣もほとんど姿を見せない。倫理学科二年生のM君（20）に教授会決定の感想を聞くと「先生たちは刀折れ矢つきたんですね。もういくら抵抗してもムダだ」とあきらめ切った表情。

文学部のほとんどの学生は受講票をもらっておらず、正門前まで来てもはいれない。学生たちは「先生たちは大学法を背景にした権力に屈したのだ」「いや現状ではそれもしょうがない」「授業を受けたいけど、無理強いは反対だ」などと通過められた教授会、学生の間に広がるあきらめと無気力、無関心がめだった。



10/12 朝日


**東京教育大学文学部の学生諸君へ**

十月十三日（月）より文学部教官による講義を全面的に再開することになりました。　所定の手続きにより入構証を受領してください。

新しい学科分担表の印刷物は十三日中にできあがります。

東京（〇三）九四六―二一五一（代表）

昭和四十四年十月十二日　東京教育大学